

ほとけの 混和会だより

令和四年七月
東光院
仏の混和会
第161号

眞の幸地は 悟りの境地

人々は幸せを求めて長い人生を歩みます。眞の幸とは悟りの境地でも有りませす。よって人生は悟りを求めての旅と言えませす。

釈迦国の王子様は眞の幸を求めて城を捨てて出家されました。そして眞の幸「眞理」を見いだし「ブッダ」と成りました。



人生は悟りを求めての旅 No.6

今回は「情けは人の為ならず」と言う言葉に着目して参りたいと存じます。

だれの言葉か解りませんが、この言葉の受け止め方には、一世代前の受け止め方と現在の受け止め方。そして仏教の教えとしての受け止め方、この三通りの受け止め方があると思われませす。

一世代前の人々はこの言葉を「人に情けをかけておけば巡り巡っていずれ己自身に帰ってくるものだから、お互い様、と人には情けをかけておくものだ」と言てました。

同じように、今の人々に尋ねると「人に情けをかけるとその人の為にならぬから情けはかけない方がよい」と言う言葉が返つて来ませす。

両方とも良く解ります。そして両方ともその場の状況によつては正しいと思ひませす。

しかし仏教的解釈の仕方はいづれとも異なり、人に情けをかけることは、その人の為では

無く己の修行として行ひませす。

人に情けをかけておけば巡り巡っていずれ己に帰ってくるのだから、など見返りを求めた情けでは無く無条件の愛、慈悲の実践「布施」とか「奉仕」として情けをかけませす。しかしこれは大変難しくなかなか出来る物ではありません。よって己の修行「布施行」として行ひませす。

人に情けをかける。すると世間の人々は「情けは人の為ならず。どうせ下心があるのですよ。あの人は野心家だからね」などと、様々な受け止め方をされる場合も有つて大変難しい一面も有ひませす。

しかし、日頃から「無心」に情けをかける生き方により、人と人、共に信じ合える信頼関係と、共に寄り添うよりどころが築かれて参ります。ここから眞の幸が見えて参ります。



無心の良寛

江戸時代の禅僧、清貧に徹した越後の良寛さんは「無心」に付いて左記の如く歌つておられます。

「花無心にして花を招き 蝶無心にして花を尋ねる」

花は無心に蝶に蜜を施す。蝶も無心に受粉の手伝いをす。 「お互い様」 「共生」の世界です。

相手の不幸を思いやる同情と言う情けでも無く、見返りも感謝も求めない無心の行為。自然と私達、そして人と人、網の目の如くつながり会いながら「おかげさま」と感謝の念を捧げ、生きて、生かされて、活きる。これが仏教の情けと言う言葉の受け止め方です。

無心に情けを施し、それぞれに、この清らかな仏心を育み、共に相手を理解し合うよりどころを築く事が出来たならば、悲しみ苦しみは半減し、悦びも感動も倍増して、大きな眞の幸が得られるものと思われませす。合掌 亮観



日本仏教に登場する仏様を毎号少しづつご紹介。前号に引き続き善光寺についてご紹介致します。

●善光寺

善光寺の始まりは日本に初めて仏教が伝来した際に、廃仏派の物部氏が河へ投げ捨てた仏像を、後に本田善光（ヨシミツ）と言ふ人物が河を通りかると水の中から仏像が飛び出たと来たり、長野の自宅へ持ち帰り家の中で一番綺麗だった白の所に祀ったのが始まりとされ、その後仏像を祀る寺院が建てられた際本田善光の名から「善光寺」とされた。この様に何処かの派の僧侶が建てた寺院で無い為「無宗派」とされています。

さて、善光寺の人気の由来の一つに女性を救済する仏様である事が大きくあります。昔は、富士山など日本の信仰の高野山など日本の場所が多く、は禁制の場所が多いため、性は神仏に救いを求めた。くても難しい時代でした。しかし、善光寺の仏様に、お姫様を救い蘇らせたという伝説がある事から、

鎌倉時代には珍しくジェンダーレスな寺院として男女問わずお堂に招き仏様と仏縁を授かれる場として信仰されました。

善光寺の僧侶曰く「昔は文字を理解出来る人も、お参りしたくても出来ない人が多かった。だから難しい教義を知らずとも救いの場だったから今があるのです」と。

さて、善光寺にお参りした際上を見上げると額の文字の中に五羽の鳩が隠れていきます。これを「鳩字」といいますがなぜ鳩字なのかは不明です。宗教は違いますが、鳩と言え「平和の象徴」のイメージが強いのですよね。何でも受け入れる善光寺なので若しかしたら額の文字からも人々の平和と幸せを願い見守る為にいるのかもしれないですね。



「自然との共生」



ロシアの食糧危機を救った 家庭菜園 「ダーチャ」

ロシアの紛争によって、様々な食材が高騰して参りました。

六割以上輸入に依存している。日本の食材。紛争に巻き込まれ交易に制限がかけられたらどうなるのだろうか日本人は生きて行かれるのだろうか、などと様々不安がよぎる昨今でございます。

しかし、ソ連邦が解体された九十年代には経済の衰退と共に大変な食糧危機に見舞われましたが、ロシアの伝統である。自給自足の家庭菜園「ダーチャ」によって救われたそうです。

ダーチャとは農園付きの別荘のことで、なんとロシア人の半数以上、モスクワ市民は八割以上の人々が都心から100km以上離れた所にその「ダーチャ」を所有しているとの事でした。

どうも国の政策で余剰地は、貸し出さなければ成らないと言う法律が出来ていて、紛争に備え、何時原爆が投下されても良いように郊外に農園付きの別荘を所有して居るのです。

お陰様で二十二年もの長きに渡って継続することが出来ました。誠にありがたいことと存じます。

ちよっと怖い話ですね。亮観拝